

東北工業大学60周年記念事業
建築学科卒業生座談会

ARCHITECTURE

「建築」を学ぶ、 その先に広がる未来

東北工業大学建築学部



2025
Faculty of
Architecture

東北工業大学



座談会の様子は
動画で公開中です



前編



後編



未来のエスキースを描く。
東北工業大学

お問い合わせ

東北工業大学 建築学部

〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町35-1

TEL 022-305-3600 (建築学科事務室)

WEB <https://www.arch.tohtech.ac.jp>



小西泰孝 栗本直美 大豆生田敏男 中沢有美子 齋藤和哉



建築学科卒業生座談会 登壇者 （登壇順）



齋藤和哉建築設計事務所

齋藤 和哉 さいとう かずや

1979年宮城県仙台市生まれ。2003年東北工業大学大学院工学研究科建築学専攻修了。阿部仁史アトリエ、ティーハウス建築設計事務所勤務を経て、2010年に齋藤和哉建築設計事務所を設立。主な作品に金蛇水神社外苑 SandoTerrace（第42回東北建築賞作品賞受賞、2021年度グッドデザイン賞）など。



中沢建築設計室

中沢 有美子 なかざわ ゆみこ

1969年宮城県仙台市生まれ。1993年東北工業大学工学部建築学科卒業。竹中工務店設計部勤務にて、工場、オフィスビル、ライブホールなど大規模建築から、改修・増築まで多岐にわたる設計を担当し、2021年より設計部課長を務める。2025年に中沢建築設計室を設立予定。



阿部和工務店

大豆生田 敏男 おおまめうだ としお

1972年栃木県生まれ。1995年東北工業大学工学部建築学科卒業。阿部和工務店勤務。施工管理の経験を経て、現在は設計部の部門長として営業・企画・設計・施工までを管理する。主な設計に杜の都信用金庫本店、仙台市消防局救急ステーション（仙台市優良建設工事表彰）など。



Nao空間設計

栗本 直美 くりもと なおみ

1969年宮城県仙台市生まれ。1992年東北工業大学工学部建築学科卒業。乃村工藝社商環境デザイン部勤務にて店舗設計に携わる。結婚を機に夫のふるさと山形県鶴岡市に移住し、2005年にNao空間設計を設立。住宅、店舗、旅館、こども園など多様な空間設計を手掛け、建築士として街づくり活動にも取り組む。



小西建築構造設計 / 武蔵野美術大学

小西 泰孝 こにし やすたか

1970年千葉県生まれ。1995年東北工業大学工学部建築学科卒業。1997年日本大学大学院理工学研究科修士課程修了。佐々木睦朗構造計画研究所勤務を経て、2002年に小西泰孝建築構造設計を設立。2017年より武蔵野美術大学造形学部建築学科教授。主な作品 [構造] に神奈川工科大学 KAIT 工房（石上純也、第3回日本構造デザイン賞、第50回BCS賞特別賞）など。



東北工業大学 60 周年記念事業のひとつとして開催された座談会。

東北工業大学での学びを活かし、建築というフィールドで経験と実績を積んだ

卒業生 5 人をお招きしました。

立場や肩書きは様々ながら、建築業界の最前線で活躍する方々です。

在学中の印象深いシーンや先生から掛けられた忘れられない言葉。

それぞれの仕事を通じて学び得た、建築を仕事にすることのおもしろさ。

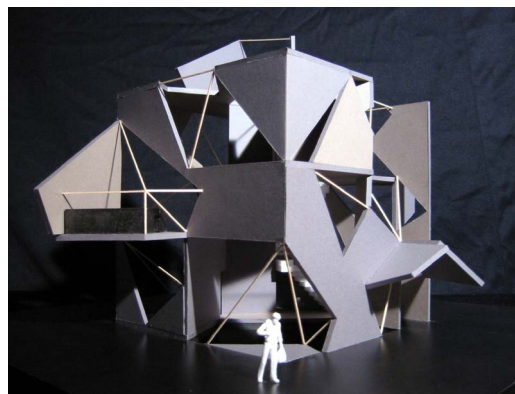
そして、これから建築を学ぼうとする若い人たちに向けたメッセージをいただきました。

5 人が語る言葉から、建築の魅力や楽しさを感じてみてください。





金蛇水神社外苑 SandoTerrace



設計課題「10m×10m×10m」



東北工業大学60周年記念事業
建築学科卒業生座談会

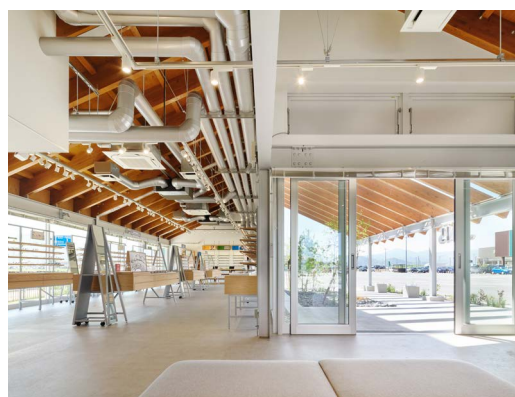
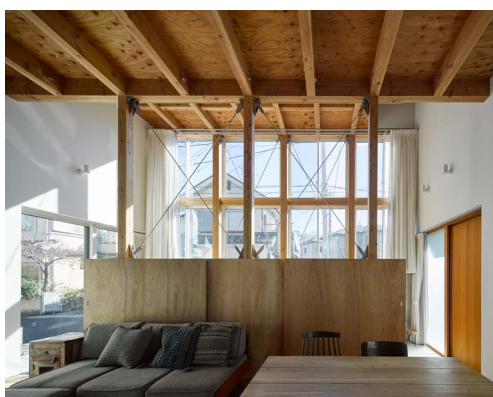
ARCHITECTURE

「建築」を学ぶ、
その先に広がる未来

東北工業大学建築学部



浦和のハウス



JINS会津若松店



いいきとし
司会 石井 敏

東北工業大学 建築学部
建築学科教授
(副学長・建築学部長)

石井 この座談会は東北工業大学60周年の記念事業のひとつとして企画したものです。建築の学びの魅力、そして建築の仕事の魅力をお伝えできたらと思います。

東北工業大学は1964年に創立しました。2024年度で60周年となりましたが、その中で工学部建築学科は創立から2年後の1966年にスタート。さらに2020年からは建築学部建築学科としてパワーアップをして、再スタートを切ったところです。工学部と建築学部、それぞれの歴史を合わせて58年になりますが、卒業生は約9000名に上ります。その多くが建築に携わる仕事をされていまして、仙台や宮城だけでなく、東京をはじめとする全国各地に。海外で活躍されている方もいます。

今回の座談会では特に40代から50代の、卒業してから30年前後になるでしょうか。それほど経験と実績も積み重ねた5名の卒業生の皆さんをお招きしてお話をうかがうことにしました。

今回は仙台、山形、そして東京からお越しいただいております。

今日は皆さんの経験や在学中の学び、そして現在の仕事についてうかがいます。そのお話を通して、建築を学ぶ学生に、そしてこれから建築を学ぼうとしている若者に対して、建築の魅力や楽しさを伝えられたらと思っています。本日はどうぞよろしくお願ひしたいと思います。

まずは皆さんから自己紹介をいただきます。齋藤和哉さんからよろしくお願ひいたします。

齋藤 和哉 齋藤和哉と申します。よろしくお願ひします。私は宮城県仙台市に生まれ、今も仙台で暮らしています。2001年に当時の建築学科を卒業後、大学院に進学し、2003年に大学院を



修了しています。その後、設計事務所に勤務し、2010年に自分の設計事務所を立ち上げました。なので、独立してからはだいたい15年ぐらいが経ちました。

僕の事務所は、建築業界の中では「アトリエ系」と呼ばれる設計事務所です。今まで比較的いろいろな用途や規模の建築設計に携わってきましたが、その中でいろいろとテーマを掲げて仕事をしてきました。そのきっかけとなったのが、実は大学院時代の設計課題です。当時の大学の課題で「10m×10m×10mの立方体を住宅にしない」という課題がありました。この課題に取り掛かった時に考えたのが「曖昧さ」。それ以来、自分の設計を考える時のテーマにしようと思って今も考え続けています。これは当時作った模型写真です。内と外、どちらが内とどちらが外なのかわからないような境界や表皮面。それが曖昧になるような建築をつくることをおもしろいと考えながら今も設計をしています。

本来は相反する言葉をうまく結びつけられるような建築をつくれなかつとも思っています。例えばこれは埼玉県浦和市にある住宅ですが、この住宅は「閉じながら開く」がテーマです。外側から見ると開口部が印象的ですが、中に入ると



東北工業大学香澄町新1号館（施工に携わる）



杜の都信用金庫本店（設計）



ガモウパーク「海の近くのドッグラン」（設計）



東漸寺鐘楼（設計）

周囲から視られることなく明るく開放的な住まいをつくりました。そしてこれはメガネショップのUNSS会津若松店の店舗です。ここではお店と地域と分ける考え方をするのではなく、その間を緩やかにつなげられる公園のような役割を持つ店舗にできないかと考えました。

金蛇水神社という神社の参道も設計しています。これも俗と世、ハレとケの考え方のように、中間領域の建築として捉えて設計をしています。そして人や社会を幸せにするために建築が存在するのではないかと考えながら設計をしている、というのが簡単な自己紹介になります。以上です。

中沢 有美子 中沢有美子と申します。仙台市出身です。東北工業大学は1993年に卒業しまして、その後、竹中工務店の設計部に就職しました。2024年まで約32年間設計部で働いていましたが、現在は自分の事務所を設立予定です。

これまでではゼネコンの設計部として大規模な建物を設計してきました。入社当時のホテルにはじまり、その後はオフィスビルや小規模な病院、寮、ライブホールのほか、ここ数年はテナントオフィスビルや1万〜3万㎡の大規模な半導体系

工場の設計を担当してきました。このほか、個人住宅も手掛けています。

ゼネコンの設計部では学校や病院など特定の建物だけ設計するスタッフも多いのですが、私は支店にいたこともあり、改修や増築も含めて多岐に渡る建物の設計をする経験ができました。本当にいろんな経験を重ねることができた32年間だったと思っています。

これは設計した担当した専門学校の学生寮です。そしてこれが仙台市内にある印刷工場。小規模な工場ですけども、お客様と一緒に案を考えて完成した思い出深い建物ですね。自宅のコンクリートの住宅は2007年頃に竣工しています。

これからは自分でよく考えながら丁寧な設計をしていきたいと思っています。以上です。



大豆生田 敏男

阿部和工務店の大豆生田敏男と申します。私は仙台出身ではなく、栃木県栃木市出身です。進学の際にいろんな土地に行きたいと思っていましたが、仙台に来てみたら気に入ってしまいました。そのまま、東北工業大学に入学して、今も仙台で働いています。

卒業したのは1995年。今はゼネコンの設計部という立場ですが、入社後は様々な仕事を経験しています。施工管理は15年ほど担当しました。学生時代はあまり設計が得意ではなく、「施工管理として現場で働く仕事に」と考えていましたが、いつの間にか阿部和工務店でいろいろな部署を回りながら、最終的に現在は設計の部門長として設計だけでなく工事にも携わらせていただいています。実は、東北工業大学香澄町新1号館は弊社が施工を担当しました。私がまだ若かった頃に携わらせていただきました、無事に竣工できたことがひとつの誇りになっています。

私たちの会社は仙台市内でいくつか建設工事にも携わっていますが、仙台市から優良建設工事表彰などもいただきました。今、そうした技術も活かしながら設計業務を行なっています。作品としては、



© Blue Hours 沖裕之

専門学校学生寮



個人住宅（自邸）



© Blue Hours 沖裕之

印刷工場

小さな物件から大きな物件まで様々です。ひとつは「杜の都信用金庫」の本店。これは私が設計させていただきました。その他、牛小屋からドッグラン、病院など、様々なお客様の依頼に応える設計に取り組んでいます。

現在私は、お客様からの依頼を受けた建築物の企画立案から設計、施工管理まで、一連の流れを管理する立場になりました。ですから今は非常にやりがいのある毎日です。きっと今後も設計の仕事を続けていくのだと思います。まだまだ勉強の日々です。以上です。





神奈川工科大学 KAIT 工房（建築・写真：石上純也建築設計事務所）



中国美术学院民芸博物館
（建築：隈研吾建築都市設計事務所、写真：加納永一）



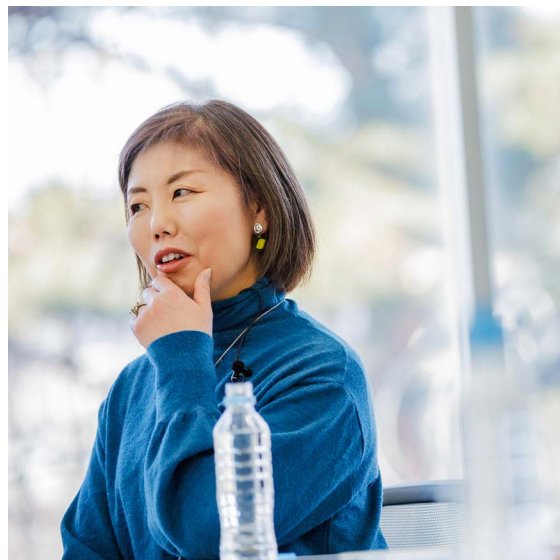
綾瀬の基板工場
（建築：浜田品則建築設計事務所、写真：長谷川健太）



小西泰孝 小西泰孝です。私は1995年に建築学科を卒業しました。4年の時に構造の研究室を選んでから、建築構造を専門とした仕事を続けています。現在は仕事のフィールドがふたつあります。ひとつは実務として構造設計する仕事です。事務所は2002年に立ち上げましたが、コンクリート、鉄、木その他、レンガやアルミニウムなど、様々な素材を扱っています。活動場所は、北は北海道、南は沖縄まで全国です。そして海外でもプロジェクトを進めています。そしてもうひとつは、武蔵野美術大学建築学科の教員としてのフィールドです。

建築設計をしていると研究しなければいけないことがたくさん見えてきます。その時に見つけた課題を大学で研究するんです。あるいは大学での研究の取組みが、実際の建築設計で成果を生むこともあります。そうした同時並行的な仕事をして、構造に携わっているという現在です。

石井 皆さん、ありがとうございます。5人に自己紹介をいただきましたので、そこから様々なお話につなげていきましょう。今、5人それぞれの自己紹介をうかがっただけでも、同じ大学で、同じことを学びながらも、その先の仕事は多様だということがわかります。「設計」とひと言でいっても会社の形や規模には多様なスタイルがあること、そして「意匠」や「構造」など様々な設計の仕事があることも見えてきました。さらにその辺りのお話をうかがいたいと思います。



栗本直美 栗本直美です。私は1992年に東北工業大学を卒業しました。卒業後は展示空間やイベント空間、商業施設の設計などを手がける会社で就職しまして、東京を拠点に商業施設のデザインに携わってきました。その後、私には大きな転機になるのですが、夫が実家の家業を継ぐことになり、それをきっかけに山形県鶴岡市に移住しました。そこから約30年が経ちます。

鶴岡に住んだばかりの頃は、今までの仕事と同じようなことができずにいろいろと悩みました。それでも、この大学で勉強した建築をずっと基軸に置いていきます。いろいろと試行錯誤をしながら今に至っているような感じです。



個人住宅

そして現在は個人事務所で幅広くいろいろな設計をしています。店舗、個人住宅はもちろん、こども園などの中大規模木造の設計にも携わらせていただいています。大切にしているのは木を取り入れた建築です。夫の家業が製材業であることから木材について勉強する機会があり、そこで「木と人はすごく似ている」と感じたことがあります。そこから木を使った建築にずっとこだわりを持って設計を

続けています。建築との関わり方は、土地探しから空間デザイン、インテリアまで空間に関わることなんでも。お客様と出会い、空間づくりのご縁をいただいたら、慣れることなく初心で取り組み、なるべく先入観を持たずに一つひとつ丁寧に取り組むことを心がけて仕事をしています。どうぞよろしく願います。



木造ならではの木組みによる強さや美しさ

Q&A

「建築を学びたい」
その思いはいつから？

石井 皆さんは東北工業大学で建築を学んだわけですが、そもそもの時点で建築を勉強したいと思ったのか。そして高校で進路を選ぶ中で、なぜ大学で建築を学ぼうと思ったのでしょうか。何か明確なきっかけや思いがそこにあるのか、そしてその時に抱いていた夢や目標があればおうかがいしたいです。では、小西さんからお願います。

小西 私が建築をやるうと思った動機はすごく単純です。父親が建築設計をしていたからです。祖父はタイル職人で、父も祖父も自宅の横にある作業場で仕事をしていました。そんな環境でしたから、小さい頃から建築があまりにも身近な存在でした。ですので、いざ何をやるうかと考えた時に建築という選択肢以外が思い付かなかったんです。建築というものに自分をアジャストしていったとも言えるかもしれません。そして今、建築に携わっている。そんな流れですね。

石井 気が付いたら自分の中には建築し

かなかった？

小西 建築しかなかったですね(笑)

石井 栗本さんはいかがでしょう。

栗本 私も気付いたら自分の中に建築しかなかった、という感じです。そのきっかけは子どもの頃だったと思います。幼い頃から店舗の内装や空間デザインの仕事をしたかったです。それなら意匠系やデザイン系の大学に進学しようかとも悩んだのですが、建築を学ぶとそこから波及しているいろいろなことにつながっていくのではないかと考えたことで、建築を専門的に学べる大学に進むことを決めました。

石井 ありがとうございます。大豆生田さんはいかがでしょう。

大豆生田 実は私も小西さんと少し境遇が似ています。祖父が鍛冶屋で、父親は建設業。どうしても身近なものとして建設関係の仕事が目に残っていました。高校時代は建設現場でアルバイトをしたことがありましたが、その当時も技術っすごいなと思っていたね。そういう技術者になれたらいいなと思いながら10代を過ごしているうちに、気が付いたら建築の道に少しずつ進んで、大学を選んでいったという流れです。ですから私も建築を選んだというより、建築をやるんだろうなとぼんやり思いながら高校に通

い、大学に入学したということになりますね。

石井 なるほど。ありがとうございます。

中沢 私が高校生の頃は、女性が長く仕事をすることをあまりイメージできない時代でした。母も近い女性たちも20代後半で仕事を辞めて、結婚した後はずっと主婦をしている人ばかり。でも私は、女性が長くできる仕事は何があるだろうとずっと考えていました。その当時、高校の女友達は公務員や先生、お医者さんを目指す人が多かったのですが、私はなんだかピンと来なくて…。そんな時に、建築家・長谷川逸子さんの活躍を知りました。当時は建築といえば工事現場くらいしか知らなかったのですが、建築の世界で長く仕事をしている女性がいることにすごくドキドキしましたね。その時に、私が目指したいのはこれかなと思いました。

石井 進路を選ぶ時期に、長谷川逸子さんを知ったんですね？それはテレビか何かで見たんですか？

中沢 何かで見たんですけど、ちょっと思い出せなくて…。

石井 それまでは建築の道に進もうという考えは少しなかったのですか？

中沢 まったくなかったです。「薬剤師かな？」とかそんな感じでした。それだからか建築家の仕事を知ってからは自分の

夢がとてもキラキラして見えましたね。

石井 ありがとうございます。齋藤さんはどうですか？

齋藤 僕は建築を勉強したいと思ったのが大学4年生の時なので(笑)。そもそも建築をやりたいと思って工大に入っていないんですよ。私は普通高校出身で、皆さんのようなバックボーンも持っていない。入れそうな大学だから入学した、というのが正直なところですよ。

石井 そういう方がいてくれてよかったです(笑)。しかし工大の学生を見ていると、確かに両親や祖父母、親戚が、どこかで建築や建設の仕事に関わっている方も多いようです。さて、そんな中で建築を学びたいと思った時に、工大の建築学科を選んだことには様々な理由があったかと思いますが。その「きっかけ」を教えてください。ただですか？ではこの質問は齋藤さんから。もう答えは出ていますかね(笑)

齋藤 そうですね(笑)。高校3年生の時に楽をして大学に行きたいと思い、指定校推薦を取れる大学の中で一番偏差値が高かったのが工大の建築学科だったんです。こんなこと言っているのかわかりませんが、それが真実です。

石井 工大に入学して勉強をはじめても、すぐには建築に興味は持てなかったのですか？

齋藤 持てませんでしたね。

石井 なるほど。では学びの中でのことは、また後でうかがいましょう。中沢さんはいかがですか？

中沢 私は父から「大学に行く必要はないだろう」「女子は高校を卒業したら十分だろう」と言われていたこともあり、地元かつできるだけ学費が少ない大学を選ぶことになりました。地元ではその当時東北大が工大しかなかったのですが、工大なら入れるんじゃないかなと思って選びました。当時は女性の学生もそれなりにいましたし、結果的によかったと思います。

大豆生田 先ほどお話ししましたが、私の実家は栃木県です。友達の多くは東京方面に進学する中、私も栃木に残るつもりはなく、東京、金沢、仙台のどこかを進学しようかと思いつきながら、工大の受験で仙台に来ました。それが、仙台駅を降りた時に見えた緑の素晴らしさと空にトンビが飛んでいる風景を非常に気に入ってしまいました。その瞬間、他の学校を受験しながらも仙台に行くことを決めました。身寄りも友達もおらず、単身18歳で仙台に来たものの、今となってはいい学校という場所を選んだと思っています。

石井 栃木から仙台に来た同級生はほとんどいなかったのですか？

大豆生田 誰もいませんでした。親戚も含めて仙台に住んでいる知り合いはまったくなかったのです。親は「なぜ？」と思ったでしょうね。

石井 ありがとうございます。

栗本 高校生の頃にはすでに空間デザインの仕事をしたいと思っていたのですが、のんびりしている性格もあってか受験に必要な科目を選択していません。進路相談の時に先生から「建築学科は受験できないよ」と言われて絶望的な気持ちになりましたが、そこで建築を学びたいならと放課後に補習を受けさせてもらい、受験に必要な科目を取ることができました。そこで、推薦していただける大学が工大でした。ご縁をいただき、今に至ります。

石井 何の科目が足りなかったのですか？

栗本 物理です。必要な単位数が取れるまで、物理の先生に何時間も教えていただきました。あの時の先生に助けられて今があると感じています。

小西 東北出身ではない私がどうして仙台に来たかというと、高校の修学旅行先が東北だったことがきっかけです。東北をいろいろと巡り、最後に訪れたのが仙台でした。この街の美しさがとても好印象で、大学を選ぶ時に仙台に行きたいと



—— 大学時代の思い出

思っていました。そして理由はもうひとつあります。私は中学の頃から趣味でアマチュア無線をやっているのですが、無線・通信の分野では仙台はものすごく有名な場所なんです。光ヶ浦や八木アンテナ、そして岩崎先生（岩崎俊一名誉理事長・名誉学長）が発明した垂直磁気記録技術など、多くの技術が仙台で生まれています。とにかく仙台はすごいところだと。そんな感じで、なんだかご縁だけでここまで来ていますね（笑）

「どんな学生でしたか？」 工大の4年間を振り返る

石井 振り返ってみると全部がつながっていきますからね。でもやはり、なぜ自分が今ここにいるのかというのは、なんとなく見えてくるものがあるのかなという気がします。

では工大に入学してから、皆さんはどんな大学生活を過ごしていたのでしょうか。こんなことに熱中して4年間が過ぎました、なんて方もいるでしょうし、こんなことをがんばったという話もあるかと思えます。「どんな大学生でしたか？」と問われたら、どのように答えますか。これは大豆生田さんからお願いできます

でしょうか。

大豆生田 正直に言いますと、一生懸命勉強していた学生ではありませんでした。実は私、小さい頃からずっとサッカーをやっていました、学生時代もサッカーに夢中でした。先ほどお話しした通り、私は仙台に親戚もいなければ友人もいませんでした。まずは友達づくりからスタートとなった時、サッカーは同級生だけでなく、先輩と後輩のつながりも広がってくれました。そうした関係性に支えられて、少しずつ輪を広げながら楽しく学生生活が続けられたのではないかと思います。きっと今の学生さんたちの方が私よりよっぽど勉強しているんじゃないかな（笑）

栗本 私は空間を考えたりするとワクワクするタイプだったので、課題が本当に楽しくて。徹夜してでもやりましたし、設計の課題には一生懸命取り組んでいたと思います。だけどその反面、構造や歴史がすごく苦手でした。そういう時は成績のいい先輩からポイントがチェックされている教科書を借りて勉強したり、優秀な同級生にいろいろ教えてもらったりしながら、なんとか単位を取って卒業できたところです。

部活はテニス部に所属していました。その当時、運動ができる部活はテニス部くらいしかなかったんですね。女性の部

員も本当に少なかったです。それでも男性女性関係なく、フラットにみんなと友達付き合いができていたなと思います。先輩たちとの交流も多く、工大から八木山南団地の方まで走る練習メニューを一緒にするのも遠征に行くのも楽しかったです。

またこれは学生生活の話ではないのですが、当時からずっと彫金をやっていました。その時に思ったのが、彫金を展示する空間から建築、そしてランドスケープにつながっていくのかなということ。彫金の小さい世界観をつくりながらそんなことを思い描いていたような大学生活でした。

石井 栗本さんは勉強もがんばって取り組んでいたようですね。

栗本 そうですね。でも成績はそんなに。部活もしながら、設計課題は徹夜で仕上げていたのですね。

栗本 そうですね。設計課題は結構がんばっていましたが、好きでした。でも苦手な科目には本当に苦勞しましたね。

石井 当時、建築学科に女子学生はどのくらいいましたか？

栗本 クラスで4人はいましたね。一年に10〜15名ぐらいはいたかと思えます。

石井 2023年度に入学した1年生では女子が3割を超えました。こうした状



しました。工大って、そういうネットワークがすごいんですね。横のつながりも縦のつながりもありますし。建築学科だけで当時200人の学生がいましたが、上の学年も下の学年も含めてネットワークを最大限に使わせていただいて、自分を成長させられる場所だったなと感じます。

部活はやる気がなかったのですが、運動不足で捻挫したことをきっかけに何かやらなきゃと思い、少林寺拳法部の門を叩きました。初的女子部員でしたが、ちょっと型だけでも勉強させてくださいと頼み込みまして。でもそれが、他の学

科の人とお会いするきっかけになりました。女子高出身だったこともあって男の人と喋るのは少し苦手だったのですが、学科を超えた横と縦のつながりが広がったのはよかったなと思っています。

石井 ありがとうございます。「つながり」のお話は仕事の中のネットワークに関係してくるがあるかと思うので、また改めてうかがいたいと思います。では齋藤さん。大学3年生までと4年生以降で何か変わったのでしょうか。

齋藤 大学3年生までは、授業が終わったら友達の家が集まって麻雀をして飲んで合コンをしてバイトをする、みたいな生活でしたね（笑）。授業にもまじめに出席していない学生でした。

石井 それが変わるきっかけがあったわけですね？

齋藤 そうじゃないと今こうなっていないからですね（笑）

石井 わかりました。では、その肝心なところは次の質問での楽しみにとおこきましよう。では小西さん、お願いします。

小西 学生時代は建築もそれなりに勉強しましたが、それと同じくらい一生懸命だったのが部活です。先ほどもお話ししましたが、私は中学からアマチュア無線をやっていて大学でも「電子技術研究会」に所属していました。キャンパスがある



八木山は、テレビ局の電波塔があるぐらいですから電波の飛びがとてもしやすいです。だから世界中と無線で通信していましたね。部活には建築学科の学生は私しかおらず、ほとんどが電子系、通信系の学生でした。彼らにはプログラミングを教えてもらうなど、他学科の学生と交流できたのはよかったかなと思っています。

アマチュア無線は建築とまったく関係ないかいうとそうでもないんです。アマチュア無線は世界中と通信できるので、例えば西洋建築史の授業でギリシャ建築



況も当時とは全然違いますよね。では、次に中沢さんお願いします。

中沢 工大は工業高校から入学してくる学生が多くいますよね。もともと建築のスキルがある人が私の周りにも多く、1年生で製図の授業を受けた時には、工業高校出身の人たちが優秀すぎて私はもうだめだと思いました。あ、なんか違うところに来てしまったな。と。そこで少し焦り出して、建築の雑誌を見たり、大学の中にいるいろんな人をつてをたどって設計事務所でバイトさせていただいたり

の話題が出てきた時はその後部屋に行って、ギリシャの無線局を探している話をしたこともありました。実際に大学3年の夏休みにはヨーロッパ行き、交信したギリシャ人の友達を訪ね、一緒にパルテノン神殿を訪れたことがありました。無線を通じて建築への興味も一段と強くなったなと思います。今思えば、大学というところにはいろいろな興味を引くものがあふれていましたね。それに片っ端から首を突っ込んでいた。そんな感じがします。

それぞれの胸に残る 工大での印象的な思い出とは

石井 今いただいたお話ともつながっていくとは思いますが、大学の学びや学生生活の中で、特に印象に残っている出来事や思い出はありますか？ 大学時代を振り返り、思い返した時、皆さんは何か一番に思い浮かぶのでしょうか。今の話にもつながると思うので小西さんからお願いします。

小西 そうですね。いろいろなことを思い出しますが、その中で一番印象残っているのは川股重也先生の研究室での思い出でしょうか。川股先生は制振構造や



石井 たしかに大学の外に出て、実際に社会の中に飛び込んだ経験は思い出になるでしょうね。ありがとうございます。では、齋藤さんお願いします。

齋藤 大学4年生の時に1カ月間ベネチアに泊まり込んで作品をつくったこと。それが僕の人生を変えました。

建築家の阿部仁史さんは宮城スタジオム（現・キューアンドエーススタジオみやぎ）を設計した方ですが、私が在学していた時には工大で研究室を持っていて、私はその研究室の学生のひとりでした。

そんな時に、阿部先生がイタリアのヴェネチアで二年に一度開催される「ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」に招待され、研究室で作品をつくることになりました。突然、それまで触ったことのないPhotoshopを使って準備をして現地へ向かい、1カ月間泊まり込んで設営をしました。毎日徹夜に近い状態で設営をしていたのですが、周りにはあちこちに有名な建築家がいたんです。ザハ・ハディドさんや磯崎新さん。妹島和世さんもいましたね。そういう華やかな世界に突然触れてしまったもので、要は感化されちゃったんです。あの経験をやるまでは学生生活が無計画で過ごしていたんですけど、実は成績がよくてハウスメーカーの総合職で本社採用が決まっていたんです。でも、その内定を蹴ってまで建築意匠（デザイナー）の道に進みたいと決意した時から、僕の大学生活が始まった気がします。あの出会いがなければ今、こうした仕事はしていないと思います。

僕は今、母校の工大で非常勤講師をしています。似たような経験をしている学生は実は多いようです。どんな人と出会うか。これが大学生活の中で重要なのではないかなと思います。

石井 建築学科には分野が異なる研究室が15以上ありますが、その中で阿部仁史

免震構造の研究と同時に大空間構造の研究もされていて、国立代々木競技場第二体育館の構造設計も担当された方です。研究室ではよく昔話をしてくれて、その時に「小西くん、国立代々木競技場はなんだか難しそうな形にみえるけど、構造力学の授業で教えた示力図の力の釣り合いで計算しているんだよ」という話をしてくれました。その時に、今、自分がやっている基礎的な勉強がとても魅力的な建築デザインにダイレクトにつながっていると強く感じました。そこからですね、構造の勉強をするのが楽しくなったのは。この出来事がきっかけで、大学院では大空間構造を専門とする研究室に進学することになりました。

石井 先生からの何気ない言葉やちょっとした出来事が大きなきっかけにつながることもありますよね。では、栗本さんお願いします。

栗本 一番思い出深いのは、研究室で過ごした1年ですね。私は川向正人先生の研究室でしたが、「建築は本の中だけではなく、実際に足を運ぶべきだ」とおっしゃって、東京方面や酸ヶ湯温泉、葛温泉などに研究室のみんなを連れていってくださいました。一緒に建築を見て、その場に行くことでしか感じられない建築の見方を教わったあの1年間は本当に楽しかったですね。

一緒に学んだ研究室の仲間たちはみんな個性的でした。それぞれに違いはあるけれど、お互いを認め合って尊重し合える仲間で、研究室はとても楽しく過ごさせてもらいました。それが印象に残っていますね。

石井 研究室に入ってから時間というのは、大きな教室で授業を聞いているのとはまったく違う楽しさがありますよね。

栗本 そうですね。意匠が好きな人たち、構造が好きな人たちなどそれぞれ研究室に分かれると自分の得意なものに特化していくと思うのですが、私の研究室は建築デザインが好きな人たちが多かったの、「どうしてその建築家の作品が好きなの？」とか「この建築のこういうところがおもしろいよね」とかいろんな話を聞いて、なるほどと思ったり。そういうお話も含めて研究室は楽しかったです。

大豆生田 私の場合は苦い思い出が印象に残っていますね。建築学科に入学した時に、すでに一級建築士の資格を持っている方が隣のクラスにいたんです。今も仲良くさせていただいていますが、製図の課題では今にも建ちそうな図面を提出するんです。それを見て、「私に設計は無理だな」と思ったのが強く印象に残っています。施工の勉強がしたくて入学した

とはいえ、あの時から設計から逃げてしまっていたかもしれません。それでも同じように設計から逃げてきたような仲間が集まった計画系の研究室ではいろんな建物を見に行つて建築を学んだ思い出もあり、やはりどの出来事も楽しかった思い出だと感じます。

石井 建築を学ぼうとする人の多くは、設計やデザインを勉強したくて入学してくると思うんです。それが建築の仕事だとイメージされることが多いですが、仕事はそれだけではないし、学びもそれだけではない。そうした中で自分のやりたいことや自分に合っていることを探していけるというのが建築のおもしろさであり、魅力だと思いますね。では、中沢さんお願いします。

中沢 学生時代に印象深かったことはふたつあります。ひとつは、たしか2年生の時だったと思うのですが、川向正人先生が建築家の隈研吾さんをゲストに連れてこられた時です。当時の隈さんはまだ世の中にあまり知られていなくて、でも川向先生は「すごい人を連れてきた」とおっしゃっていたんです。その後すぐに隈さんは有名な建築家になるのですが、若手だった隈さんからその時の気持ちを話してもらったことは今でも鮮明に覚えています。工大は著名な先生や建築家

建築を生業にすること その魅力はどこにある

齋藤 うーん、そうですね。仕事の楽しさ……。全部が全部楽しいかというところでもなく、どちらかというとよくわからないからやっているという感じはありますかね。なんといいますが、これは一生の仕事というより、自分がやりたいなという学問だと思っています。建築って少し不思議で、人のお金で人につくってもらうものです。設計をメインに仕事をしている場合は特にそう。ですから、人とかにコミュニケーションを取れるかが大事になってくるんですよ。何か問題があるから計画を立てて、建築を建てることで状態を改善する仕事が発生してくると思うのですが、僕がそれに介入することが少しでも状況が良くなるのがやりがいだと思います。自分ひとりだけでは全然できない。お施主さんがいて、つくる人がいて、その人たちもちゃんとうまくつないでいくというのが、建築家としてのやりがいなのではないかと思っています。

石井 どれだけやってもわからないことは出てくるし、建てるものが違えば考えることも違う。常に学んでいく姿勢はずっと継続していくでしょうね。中沢さん



を連れてきてくださる大学だったんだな、と今振り返っても思うところです。

もうひとつが研究室です。私が入った山田晴義先生の研究室では町おこしの研究に取り組んでいて、私は大分県にあるダムに沈む町の実測調査に連れて行っていたことがありました。その時、地元の方たちと宴会をしたんです。学生ではいわゆる顧客と話す機会がないので、あの時の経験はいまだに忘れられない思い出になっています。



は大きな会社で30年ほど仕事を続け、現在はご自身の事務所を立ち上げるというタイミングですが何かお話いただけますか？

中沢 齋藤さんがおっしゃったことは私も思っていて、いろんなお客様の考えをつないでいくコミュニケーションは会社員時代にいろいろ勉強させていただきました。やはり同じ建物はひとつもなく、その都度わからないことばかり。最近では工場の設計することが多かったのですが、工場には製品ごとにいろんなル―

ルがあるうえに、何十人もの関係者が打合せに出席します。その方々の最適解をつくっていくのは非常に難しい仕事でしたし、社内的にも設計と施工でベストの形でやりたい思いも当然あるので、全員が幸せな結果を感じられるプロジェクトは、最後にみんなが本当に喜んですよね。それまではずっと苦しいんですけど、その喜びの表情を見たいからこそ仕事を続けてこれたと思っています。

石井 ありがとうございます。大豆生田さんは施工管理から設計、営業まで様々な仕事を経験していると思いますが、その中の仕事のおもしろさ、魅力について教えてください。

大豆生田 営業から始まり企画設計、施工まで、最初から最後までお客様と打合せをしながら進んでいくのが我々の仕事です。先ほど中沢さんもおっしゃっていた通りお客様の夢を形にするのが大前提なので、密なコミュニケーションを大切にしていかないといふ建物はできません。我々はよく「お客様満足度」といいますが、お客様に満足していただける建物をつくるために、コミュニケーションはすごく大切なスキルだと思っています。

また、ひとつの建物を建てるにあたっては関係する全員がwin-winになっていかなければなりません。お施主様にいい

建物だと言っていただかなければなりませんし、協力業者も我々の会社も利益を確保しなければなりません。こうした皆さんをwin-winにすることは一番のやりがいでもあり、難しいところでもありません。現在は自分の裁量でプロジェクトを進めることができる立場になったこともあり、新たなおもしろさとやりがいを感じているところです。

石井 30年以上の経験を積まれてきて、なおかつ様々な苦勞も経験したからこそ伝えられる言葉だと感じました。では栗本さん、いかがでしょう。

栗本 楽しく設計を考えてスタートしても、頂上に行くにつれていろいろと課題が見えてくることがあります。それでも、一つひとつの問題が解決されて終盤に差し掛かってくると、本当によかったなと思えるようになるんです。苦勞はするけど、もうひとつまた山を登りたくなる。設計はその繰り返しです。そこにある楽しさとはなんだろうと考えてみると、対話のような形で一緒に作り上げていく過程なのかもしれません。お施主さんが打合せの中で伝えきれないことや言葉にできないことを拾い出して広げていたり、お施主さんの想像の先に自分のノウハウをプラスして提案したり。そうしたセッションから生まれたものが、山登

りが終わった時のような爽快感になるような気がしています。このプロセスをもう一度、もう一度と繰り返して何十年も仕事ができているのかもしれない。そして私もコミュニケーション能力はすごく大切だと思うので、日頃から同じ建築業界にいる人だけではなく、いろいろな分野に携わる人たちと交流を持って話をすることを大事にしています。

石井 小西さんはいかがでしょう。

小西 そうですね。この仕事をおもしろいと思ったきっかけには、この仙台という街がすごく影響しています。私は1995年に大学を卒業したのですが、その年の3月に『せんだいメディアテーク』のコンペの最優秀案が決まったんです。伊東豊雄さんが提案したのはこれまでに見たことのない構造で、こんなすごい建築が世の中に生まれるのかと衝撃を受けました。そうこうしているうちに私は大学院進学のために東京に行くのですが、たまたまご縁があり、『せんだいメディアテーク』の構造設計を担当された佐々木睦朗さんの事務所でアルバイトをすることになります。そこで『せんだいメディアテーク』の設計プロセスを間近に見ることになるのですが、その時に、構造には建築をより美しくより豊かにする力があるのでないかなと強く感じました。

そしてすごく魅力のある仕事だな、と。その時のモチベーションが今につながっています。

石井 小西さんはデザイン性の高い建築物の構造設計を担当することも多いかと思いますが、設計の分野は違って、齋藤さんや中沢さん、栗本さんと同じようにコミュニケーションは大切だと思いますか？

小西 すごく大事だと思います。私は構造設計というポジションにはいるのですが、いい建築をつくるためにはいろんな人と関わることが大事です。構造だけのこと考えていてもうまくはいきませんかね。

建築の視点から考える コミュニケーションの大切さ

石井 今うかがった中で共通しているのは、「人とのつながりやコミュニケーション」がすごく大事だというお話でした。人と話をしたり人の話を聞いたり、それを受けてまた別の形で話題を返したり。いわゆる対話することは、皆さん大学時代から得意だったのでしょうか。それとも仕事をしていく中で培われていったものなのでしょうか。

齋藤 僕の場合は、合コンとかバイトで培ったのかもしれない(笑)。まあそれは冗談だとしても、例えばデザインがとても上手な人がいても、案の良さに加えて「この人なら任せてもいいな」と思ってもらえる人柄や仕事に対する熱がなければ仕事は生まれなと思うんですよね。もちろん対話が苦手な方もいるでしょうし、それをできるようにすることはなかなか難しい。でも、なんていうんだろうな。もちろん人と会って話すことが前提ですが、対話だけではない人との関わり方があると思うんです。それこそ今では情報技術の発達も伴っていろんな手段も増えてきているので、どちらかというとその人次第かなとも思います。

石井 建築を仕事にする上で大切なコミュニケーションスキルは誰しもが最初から持っているものではないし、その一方で鍛えられることで身に付いていくこともあると思います。齋藤さんからは対話に頼らずとも建築にはできる仕事があるというお話がありました。中沢さんはこれまで仕事をきて、コミュニケーションを通して人とのつながりについてはどう感じますか？

中沢 私は大学生の時に男性と話すのが苦手だったこともあり、男性ばかりの会社では仕事について質問するだけでも緊



になりました。そこに至るまでには10年ぐらい時間がかかったかと思いますが、そこからは話すことだけでなく、図にして説明することも加えることで、どんな相手に伝わっている手応えを感じるようになっていきました。

建築はうまく話ができなくても模型や形として伝えることもできますよね。そういうことも得意な人は伸びていくと思います。

石井 ありがとうございます。大豆生田さんは話すことは得意ですか？

大豆生田 仕事している今では打合せも多く、上司や部下と常にコミュニケーションを取る環境に身を置いています。学生時代は友人以外の人たちとコミュニケーションを取るのにはなかなか難しかったですね。でも、対話や会話を重ねる経験を積んでいくことがスキルの向上には不可欠なのだろうと思います。コミュニケーションの問題解決の鍵はコミュニケーションです。一生懸命にコミュニケーションを取ろうとする人を、周りのみんなは助けてくれるはずです。自分にはコミュニケーション能力がないと思っても、周りの人とよく相談しながら仕事をしていく。そして一生懸命にやる。これが大切なのだと思います。

石井 栗本さんはいかがですか？

栗本 私はいまだに話が下手なので、こうした場に招かれてもうまく話ができないなと思うのですが、仕事をしているときは聞き上手や話し上手ではなく“話させ上手”になろうと思っています。相手の話を引き出すには、こちらから合の手を入れるようなノウハウや知識がなければいけません。そのためにも私はいろいろな人たちと交流しながら建築以外の分野にも興味を持ち、自分も楽しく暮らすことで“話させ上手な人”になろうと努力しているところです。

石井 ありがとうございます。小西さんは無線で世界中の人とコミュニケーションを取っていたようですが、それも建築につながる部分があるのかなと思います。

小西 そうですね。アマチュア無線で顔を見ない非対面のコミュニケーションをしていたので、コロナ禍でオンライン会議が主流になった時には、ついに自分の時代がきた！と思いました（笑）。でも、コミュニケーションに関しては先ほど齋藤さんもおっしゃっていましたが、建築ではいろんな手段を使ってコミュニケーションを取ることができると思うんですよね。話すことで伝えるのはもちろんですし、図面、模型、CGなど、多様な方法があるので、自分の得意ではないこと



東北全域に広がり続ける 工大のネットワーク

石井 皆さんありがとうございます。建築学科の卒業生は約9000人います。建築の仕事をしているとどこかで大学の友人や先輩、後輩とのつながりが見えてきたり、それが活かされたりすることがあるのではないかなと思います。実際お仕事の中で、同窓生であることが助けになったとか、同期・同窓の関係性が活かされたというお話があれば教えていただきたいです。

齋藤 これまでに何度も小西さんとはお仕事をさせていただいていますが、石井先生がおっしゃる通り、相当数の卒業生が東北を中心に各地にいらっしやいますよね。多くの役場にはいると思いますし、打合せ終わりや現場で「私も東北工大卒なんです」と伝えてくれる方がちらほらいたりすることがあります。本当にいろんなところで支えているし、支えられている関係性になっているかなと思います。

石井 中沢さんはいかがですか？

中沢 以前勤務していた社内にも東北工大を卒業した先輩や後輩が多かったです。みんなでひとつのものをつくり上げていかなければいけない時、必死になるからこそ厳しい口調になる方もいらっしやい

ましたが、工大の先輩方にはそういう方がひとりもいなかったですね。社内的にも人望があって、コツコツやる人が多い印象でした。

石井 大豆生田さんの会社にも工大出身者がたくさんいますし、仕事の関係でもたくさんの方があるかと思っています。**大豆生田** 弊社にも工大の卒業生が35人ほどいます。私は地元の設計事務所の協会で役員をやらせていただいています。どこに行っても、どのプロジェクトに参加しても、やはり工大の卒業生はかなり多い印象ですね。工大出身であることを伝えると優しくご指導いただいたり、仕事の段取りをしていただいたりします。で、実務としては非常に助かっています。

栗本 私は山形の鶴岡市に設計事務所があります。私は山形の鶴岡市に設計事務所があります。仕事でいろいろとご縁のある方もいらっしやいますし、建築協会や建築士会のおかげの中で工大の卒業生と一緒にいることがあるのですが、お話をしているととても親近感が湧いて話が弾むという。東北を中心に仕事をしていますが、こうした機会が本当に多くとても感謝しています。

小西 建築は分野が多種多様ですし、いろんなことを人に聞いたり、相談したりしたくなることがあります。でも、建築

様々な経験を重ねて 今、学生へ伝えたいこと

石井 卒業生の多くが日本全国で直接的、間接的に建築の仕事に携わられている。お互いに様々な接点やつながりを持ちながら仕事ができることが、この60年間という時間の重みなのかと改めて感じますね。

では次に、今建築を学んでいる大学生の皆さんに何かメッセージをお願いできますでしょうか。皆さんの経験を通して何か言葉を残したらどんな言葉になるでしょうか。小西さんからお願ひできますか。

小西 責任重大ですね（笑）。自分がそうしていたかは置いておいて、今思うのは大学での勉強は満遍なく一生懸命取り組んでおく必要があるのかなということです。私は構造を専門に仕事をしているの

で構造に関しては今も勉強し続けているのですが、実はそれ以外の分野の知識はいまだに大学の時の勉強がベースになっているんです。建築は自然科学を相手にしている部分が大きいので、理論が急に変わったりはしません。だから一度勉強をしたことが長く活きる分野かなと思うんですよ。そうすると一見あまりおもしろくないように思えることも、ひと通り、満遍なく大学の間に勉強してみるといいんじゃないかな。今でも構造以外の法規や設備などの知識は大学時代の教科書の知識が本当に役に立っているんです。

石井 ありがとうございます。では、栗本さんお願いします。

栗本 今の私の仕事は建築を学んだ大学生活が基軸にあります。先ほど自己紹介でお話したように、私は東京で空間デザインの仕事をしていまして、それから結婚して山形で生活を始めました。東京と山形では環境がまったく違うし、同じような仕事もできないような状況でとても悩んだ時期もありましたが、建築をやりたいという気持ちを持ち続けて自分の進みたい方向を見ていけば、車の運転のように向かいたい方向に進んでいけるんだなって。なんだか、こう…、うまく話せないのですが、建築を学んでいた大学生

活の4年間があり、鶴岡には空間デザイナーの仕事はなかったけれど建築を軸に形を変えてやってみようと思うことで今の仕事につながってきたのかなと思うので、自分のやりたいことや自分がどうしたいかという気持ちを持つことが、場所や状況が変わっても、続けていける理由になったのではないかなと思います。

大豆生田 建築を仕事とする上では、楽しくやりがいいがないことには長続きはしないと思います。そのためにも、学生時代に幅広く学んでおくことはすごく大切ですね。私自身、入社時には施工管理の部署にいたがらもいつの間にか設計を業務としていることもあり、自分の向き不向きがよくわからない部分もあります。

そういうことから、広く学ぶこと、いろんなことを勉強するのがとても大切になるのかなと思うのです。特に建築は衣食住の住を担う身近なものですし、お施主様やお客様の夢を形にして、そのままお渡しする仕事は他にあまりありません。毎回喜んでいただき、感動していただくこともある、非常に稀な職業であると思います。また、つくる建物はどうも違います。場所も違う。そしてお客様も違う。だからこそ毎日いろんな勉強をしていかなければならないのですが、その基盤は大学で学ぶ勉強を基に進化していくと思



—— まだ、建築のことを知らない皆さんに

しれません。でも、一旦辞めたっていいんです。先ほど栗本さんがおっしゃったように続けていけるポジションを見つけて、ぜひ皆さんには長く続けてほしいと思います。

齋藤 率直に言うと、建築はめちゃくちゃすごいことですね。学びの途中にいるとなかなかわからないかもしれないですが、外にいると強く実感します。なぜかという、建築はいろんなことを学ばなければいけませんよね。力学も法規も、デザインも。コスト管理も営業もしなければいけない。これをひとりでできる人材に育てられるのは、建築学以外ないと思います。社会ではほとんどが分業していますからね。なので、社会に出て建築をやっていますというと非常に貴重な人材として扱われます。僕の同級生にはグラフィックデザイナーもいますし、映像の世界で活躍している人もいれば政治家になっている人もいます。なんて言うんでしょう、自分で考えて物事を前に推し進められる人になれるんです。建築の中にあるとなかなか感じられないのですが、外に出た途端にとてつもない力を持ちます。それはとても稀有な力です。そういう目で普段接している日常を見ると、我々が建築で見ている世界はかなり特殊です。だからこそ、その目を磨くこ

とができる建築はとても重要な学問だと思います。

建築の学びからつながる 多様な未来と自身の成長

石井 皆さん、ありがとうございます。では最後に、これから建築の世界に進もうとする若い方たちに向けて、「建築っておもしろいよ」というお話をそれぞれの言葉で伝えていただければと思います。

齋藤 先ほどの話の続きのようにになりますが、建築は何にでもなれる学問だと思います。まだ進路がちょっとぼんやりしている人でも向いているのではないかな。**中沢** 建築は、ものや街をゼロからイチにつくっていきける素晴らしい仕事だと思います。そんなことをやってみたい人にぜひ挑戦してほしいです。

大豆生田 建築は一生涯成長できる仕事です。だからこそ私も今、一生懸命がんばっています。

栗本 建築は理系が得意じゃないといけないのかなと思う人がいるかもしれませんが、でも、学びの幅がすごく広い建築は意匠や構造、計画など分野も様々です。どんな分野でも人の生活に密接に関わる学問であるからこそ、建築を学ぶことは

とても優しい社会にもつながっていくと思います。ぜひ建築を学んでいただきたいです。

小西 皆さんがお話していることと重なっていますが、建築を学ぶことで活躍できるフィールドがものすごくたくさんあるので、自分のやりたいことを活かせる分野かと思います。とにかく建築はゼロから形をつくる、何もないところから何かを生み出すことを在学中から訓練していきます。そうすると、ゼロから自分で問いを立て、解決して、結果を出すということができるようになる。それが建築だと思います。建築に対するニーズは、今後ますます増えていくはず。多様な将来がある場だと思いますね。

石井 皆さん、ありがとうございました。今日、皆さんからいただいた言葉や思いが多くの方々に届くことを期待しています。そしてその結果、建築を学ぶ学生さんが励まされ、ひとりでも多くの人に「建築を学んでいてよかった」と思ってもらえることを願います。また今日のお話にワクワクして、「建築っておもしろそうだな」と、この道を選んでくれる未来の子どもたち、建築を担う人たちがひとりでも増えたらうれしいです。では、本日の座談会を終えたいと思います。皆さん、ありがとうございました。



東北工業大学60周年記念事業
建築学科卒業生座談会

ARCHITECTURE

「建築」を学ぶ、 その先に広がる未来

東北工業大学建築学部

2025年3月発行

企画・発行 東北工業大学建築学部
デザイナー 小林知博（2009年 建築学科卒業生）
ライター 及川恵子（2011年 建築学科卒業生）
カメラマン 齋藤太一

※ 本誌の無断転載・複写はご遠慮ください。